

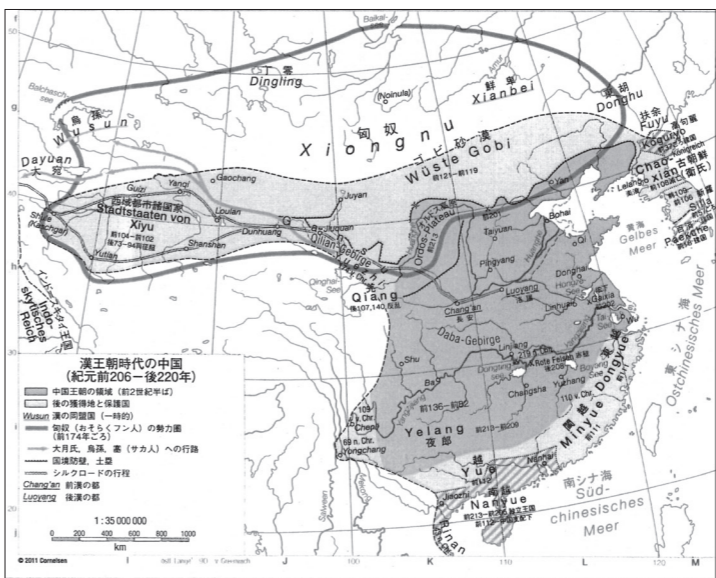
倭女王卑弥呼・大夫難升米・鮮卑族

大隈 孝一

魏志倭人伝は、魏・呉・蜀の三国を統一した晋の武帝の修史官陳寿が西暦297年までに書きあげた正史「三国志」65巻のうち『魏書』30巻へ烏丸・鮮卑・東夷伝の一項目(倭人伝)のことである。そこには「景初二(238)年六月、倭の女王卑弥呼が「大夫難升米」を魏に遣わした」と書かれている。

今回、その難升米がどんな人物だったのか、史料に基づいて大胆に推考してみる。

近年、かつて魏の首都だった黄河沿いの洛陽の近くで、南北朝時代の石碑が出土し、難氏の系譜がその碑に彫られていた。それは、官僚の難樓が松花江流域に移って難江と改名したという碑文で、このことから難は姓であることが判明。さらに難氏は、紀元前の春秋戦国時代から、黄河の北方を移動



漢王朝時代の中国地図
出典：[PTZGER 歴史地図] Cornelsen (独)発刊
(帝国書院 2012年12月 発行)

この難氏は、漢音では「ダン」、呉音で「ナン」と発音する。現代の日本でも文字こそ違いが団・檀・段、それに難波などの姓は散見される。日中国交正常化30周年記念で、長崎新聞に一年間連載した崎華往來のアモイ取材の時、先祖が住んでいたとして交流を続ける作曲家の故団伊玖磨氏のことも知った。

また難氏には、8世紀の初頭文武天皇の時に、唐から宮中に伝わった大晦日の追儺という行事が、その後節分に神社や民間で行われるようになった鬼遣らいという豆撒き行事の意味もある。

最初に、(倭人伝)が記載されている『魏書(魏志ともいう)』に鮮卑と共に烏丸と東夷の項目があることを書いたが、この烏丸は207年に魏の曹操に敗れて鮮卑の仲間となった。一方東夷は、倭国も含めて中華の東側の大陸沿岸や朝鮮半島に住む漢民族以外の異民族のことで、(倭人伝)はこの(東夷伝)の一項目にすぎない。

後漢の時代から、漢委奴国王の金印紫綬を与えるほどの交流があった倭の奴国は、現在の福岡市辺りに比定されている。その頃から独自の文字を持たなかったわが倭国の邪馬台国女王に卑弥呼の漢字を用い、やはり文字を持たなかった秀でた遊牧民に鮮卑の漢字を用いた「三国史」の修史官陳寿、その著作郎に共通する一文字「卑」を用いた意図が、何かあったのだろうか。ちなみに陳寿は、洛陽のことを京都と表現し、倭国である現在の京都に烏丸という同じ漢字が地名として使用されている。

それに、秦の始皇帝の命で徐福が船出したとされる琅邪台湾と、その徐福が上陸したとされる筑後川河口の近くに邪馬台国の候補地があるのは、単なる偶然なのだろうか。文字を持たなかった民族が文字を使えるようになった時、自らの一族の実績を未来に残そうと彼らの象徴的な文字で表現するのは、民族を問わず、永遠を願う人間の「性」なのではないだろうか。

2013〜14年に製作した日仏交易150年記念のドキュメンタリー映画「ほおずき」でフランス寺とも呼ばれた大浦天主堂を、2015年には終身流刑200年記念の歴史ファンタジー映画「ナポレオン・コード」で天正少年遣欧使節を必然的に発掘登場させた企画・製作・監督のわたしは、今、新作の歴史ファンタジー映画として「封泥・卑弥呼への信」

する遊牧民の鮮卑の一族であることもわかった。この鮮卑族の移動の様子は、程光裕・徐聖謨編纂の中国歴史地図集にも描かれており、朝鮮(韓)半島へも南下している。

また、春秋戦国時代の呉に、大翼という91人が定員的大型船など多様な船があり、大陸沿岸の現東シナ海や黄海を自由に行き来していたことが、当時の越絶書に記されている。その250年以上後の秦の始皇帝の命で、山東半島南の琅邪台湾から不老長寿の薬を探しに数千人の童男童女と百人の技術集団と一緒に東の海へ船出した徐福が、鮮卑だったという説もある。この徐福伝説は、九州から青森まで20か所もあり、日中間の交流が現在も続いている。

その後、439年に鮮卑族の拓跋氏が北魏を建てて華北を統一し、やはり鮮卑の血を引く宇文泰と八柱国たちが、隋と唐を建国し大活躍している。

このような歴史の実績をもつ鮮卑族の先達難氏。卑弥呼が魏に遣わした正使難升米が、その難氏の一族だとしたら、地理的にも、言語的にも、卑弥呼は最適な人物を正使に選んだのだ。なぜなら、この正使難升米らの派遣は、130年前の107年に倭国王帥升が後漢に使者を派遣して以来のことであり、例え朝鮮半島にあった魏の帯方郡の長官が本国に紹介したとはいえ、先祖が魏の北方にいたという地の利と、漢語を理解する能力が難升米になかったら、初めての朝貢で、魏の最大の信を得て親魏倭王の金印を賜わるとは思えないからだ。この金印は、その10年前の229年にクシャナ朝(現インド)、漢字では大月氏の王波調に贈った親魏大月氏王の金印との二個だけだった。

そして魏王明帝は、女王卑弥呼にこの金印紫綬、大夫難升米と倭人と思われる次使の都市牛利には銀印青綬などを与えた。

に、同じ手法で、鋭意格闘している。

(日本アカデミー賞協会 会員、有限会社オイス限 代表)

風信

四月と言えば八日の花まつり、二十一日のお大師様、二十九日は崇福寺のボサ(媽祖)祭。それに「ハタあげ」が始まる。

○長崎ぶらぶら節に「ハタあげするなら金びら風がしら」。「大井町の橋の上で子供のハタげんか」等があり、昭和初年ごろまでの「長崎のハタあげ」は、今では考えもつかぬほど大変にぎやかで、「帰りは一パイ機嫌で」子供達で幕ではなかったようでした。参考文献としては渡辺庫輔先生の「長崎ハタ考」(長崎県民芸協会刊)を読まれるとよい。

○先日・岡林隆敏先生(長大名誉教授)来訪。長崎県内の橋梁研究について種々と私達の知らない事を御教示戴き、其の参考資料として『長崎県の橋』(長崎新聞社発行協力)も戴いた。

○其の翌日、我が国洋学史研究の片桐一男先生より来信あり、戦後蘭学資料研究会が板沢武雄・緒方富雄両先生を中心に発足したのが昭和二十九年五月であった。そして其の蘭研が平成二年五月二十六日解散したので其の翌、平成三年六月三十日それではあまりにも淋しいと言うので洋学史学会が発足。その研究資料の一つとして三月に発刊された『江戸時代の通訳官(阿蘭陀通詞)』(吉川弘文館刊)を御恵送いただいた。長崎文化とオランダ通詞の研究は長崎の人達にとっては欲かすことの出来ない科題の一つと考えている。

○平川波声氏来訪、最近作の歌曲「優曇華」のCDを持参され、今年も「全国江差追分大会」に出場されるとの事。優勝して帰省される事を御まらしている。

○四月二十九日は旧暦の三月二十三日で、中国の海神媽祖様の誕生日であり、昔より長崎の唐寺や館内の媽祖堂では盛大な「ボサ祭」があったと古文書に記されている。

○今回ご寄贈いただいた書籍

- 一、京都・野村美術館より「研究紀要 第二五号」。岩崎竹彦氏の川上不自の研究を中心に飯島照仁氏の論考他、島村幸忠氏、井上秀二氏、下高原正人氏の研究。調査報告として宮武慶之・久留島元氏の論文が収録されている。
- 一、木村忠氏の御厚意により、本協会に「琴海町史」(平成三年刊)が収蔵されていない事より同書を御寄贈いただいた。

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

